

下茉莉

さん

●かもみいる 代表

人生をかけてぶれずにやっつけていきたい 就労を切り口にしたコミュニケーション支援

精神保健福祉士と社会福祉士の資格を持つ下茉莉さんは、障害者就労支援センターに勤務する傍ら、平成30年2月に任意団体「かもみいる」を立ち上げた。月1回の茶話会・学習会、不定期のイベントなどを通じ、発達障害当事者や家族、支援者がお互いをより理解し、コミュニケーションがとれる方法を見出すことを目指して活動している。自らも発達障害と発達性トラウマ障害を持ち、ずっと感じてきた社会における生きづらさなども、そこには色深く投影されているようだ。

●取材・文……白井美樹(ライター)

大学入学2日目で家出 比較文化を学ぶようになる

幼いころから好奇心が非常に旺盛で、学校の授業では、質問するためにずっと手を上げ続けているような子どもだったという。また、少しでもルールを守れない友達がいると、そのことが理解できず注意してしまい、生意気に思われてしまうこともあった。

そんな下さんは、小学生のときから「早

く家を出たい」と考えていたそう。だ。「両親からすごく愛情を注がれているのは分かっていたんですが、ちよつと言うことをきかないと理不尽に怒られるというソフトなDVがある家庭でした。コミュニケーションがなかなか成立せず、憤りや寂しさをずっと感じていましたね」

大学の受験先も親の希望を強く押し出されてきたが、下さんはそれを振り切り、自分の希望する大学への推薦入学を決めた。そして、大学入学2日目に家出をし、奨学

大学卒業後、福祉専門学校 に入学し、自分に対する多 くの気づきを得る

下さんは大学を卒業後、福祉専門学校に入学し、さらに学業を続けることを決意する。そこにはどんな思いがあったのだろうか。「理由のひとつは、当時社会に大きな憤りを感じていて、自分の将来にも不安があったり、就活してすぐに社会に出る自信が持てなかったということです。また、もうひと

つの理由は、死を選んだり、ひきこもりになったりした友人がいて、そういう人の受け入れてくれる場所を探しても、なかなかサービスにうまくつながらず壁にぶつかっただけでした。そういうことをなんとかしたいくて、『それなら私が支援者になつたほうが早い』と考えたのです」

ちなみに、下さん自身、中・高生のころから心療内科などを受診している。クリニックを変えるたびに、統合性失調症や双極性障害などいろいろな診断を受けてきた

が、専門知識を得て、現在は発達性トラウマ障害と認識している。当時は常に漠然とした不安があり、見通しを立てるのが苦手で、周囲が迫ってくるような圧迫感があり、視聴情報をうまく処理できないなどの問題があったそう。

「福祉専門学校に入りテキストを見ると、自分に当てはまる事例が多過ぎて『私ってやはり大変な子だったんだな』と客観的に見られるようになりました。自分には発達障害やADHDの特徴もかなりあると感じましたね。」

また、当時はたまに記憶が飛ぶことがあり、アルバイトやテストのときのことなどを思い出せないこともありました。当時の教官はそんな私が社会福祉士としてやっていけるのかすごく心配していたので、『奇



Profile

●しも・まり●

発達障害と発達性トラウマ障害の当事者支援者。障害者の就労支援期間に勤める傍ら、2018年に「かもみいる」を立ち上げ、就労におけるコミュニケーションを切り口に、茶話会・学習会を開催。現在、発達障害当事者団体「イトコサガシ」(代表:冠地 情氏)と共に企業向けの学習会にも取り組んでいる。

跡の卒業生」と言われました（笑）

就労支援のNPOに就職し 発達障害のある若者たちに 出会う

卒業後の進路として、ずっと若者の就労支援をしたいと思っていた下さん。たまにたま進路担当教官とのつながりがあった、ニートやひきこもりの就労支援をするNPOにすんなりと就職。その中の地域若者サポートステーションにおいて、若者支援事業に従事した。4年9か月そこに勤める間には、卒業時に取得した社会福祉士に加え、精神保健福祉士の資格も取得していた。

「就職し、若者のサポートステーションを訪れる人のうち、結構な高い割合で障害がある人が多いということが分かりました。そういう人たちは、経験の少ないカウンセラーが対応してもあまりうまくいきません。明らかに難しいケースの場合、本人の意思を整理したり、障害者支援施設につないだりすることが必要です」

しかし、下さんが当時そうした支援をしていて困ったのは、発達障害の人が増えているのに、つなぎ先が少なかったことだ。障害者支援施設からすると、サービスを受

ける必要がない人たちが、自分たちのところに来なくてもいいのではという考えがあったようだ。一方、下さんたちの側からすれば、一般のやり方でうまくいかないわけだから、サービスの対象になるのではないかとこの思いがあった。

「福祉分野のワーカーに、世の中には支援対象者が予想以上にいることをもつと知ってもらわないとダメだと思いました。そして外から言っても限界があるならば、自分がその職場に入って周りに発信し、障害のある若者分野に架け橋を作っていくのがいいのではないかと考え至ったのです」

障害者就労支援センターに 転職、任意団体「かもみいる」 の立ち上げ

そして、下さんは障害者就労支援センターに転職。現在も自分の障害とつきあいながら就労を希望する若者たちの支援に当たっているが、そのフルタイムの仕事をごなしながら立ち上げたのが、任意団体の「かもみいる」だ。ちなみにこのネーミングは、カモミールの花言葉「逆境に耐える」からきている。当時の下さんの座右の銘が「七転び八起き」だったこともあり、逆境

に立ち向かうイメージがよいと思って決めたそうだ。

「かもみいる」の活動を、プライベートな時間を使って社会活動の一貫として行っている下さん。このことは、職場の理解も得られているという。

「制度上、なかなかサービスにつながる人人をどうしたらつなげられるか、そのお手伝いをするのが『かもみいる』の役割だと思い、職場で担当している発達障害当事者やご家族にも案内するようにしています。主な活動は月1回開いている茶話会と学習会ですが、その中で得たノウハウを職場に還元するなど、つながりがあるようにしています。よい上司に出会えたことも大きいと思っています」

ここ2〜3年でこれまで26回開催しているという茶話会だが、まず前半に学習会を行い、後半に各自が感じたことをグループごとに話し合うスタイルが多い。内容は、就労におけるコミュニケーションということに特化している。参加者からは、自分の勤め先にどうやって自分の意見を伝えるか、職場の人とどうやり取りしたらよいかを整理できたという声が多い。

現在茶話会は、新型コロナウイルス流行

の影響でオンラインで開催されているが、

今後はリアルとオンラインを組み合わせながら開催できればと、下さんは言う。

保健師さんに もつと知ってもらいたい よりよい支援につなげたい

下さんの活動の中で、保健師さんとの関わりはあるのだろうか。

「前の職場では、ひきこもっている人を就労支援で対応するケースなどは、行政の福祉課にいる保健師さんと連携することも多かったです。

保健所の話を聞くと、統合失調症があり入院するなど、緊急性が高い場合は対応してもらえますが、それ以外ではなかなか難しいようです。保健師さんの仕事は健康や受診の相談が多いと思いますが、地域の支援機関には若者支援分野もあるので、若者サポートの分野とももつとつながるようになると思いますね」

また、下さんに、今後の展望についても尋ねてみた。すると、「私自身はこれからも就労を切り口としたコミュニケーション支援を、人生をかけてやっていきたい」という力強い言葉が返ってきた。すでに、い

くつかの期する活動もあるようだ。

「支援者向けの学習会も行っていますが、支援を充実してもらうというより、地域の支援機関が発達障害などがある若者を、支援対象として認識できるように咀嚼して、地域に返していくのが目的です。これから参加する人には、地域の支援機関が受け入れをするために、自分たちも一緒に学んでいこうと感じてもらえたらうれしいです。

また、企業向け学習会では、当事者と企業のコミュニケーションがすれ違わないことが大切だと思っています。そこにブレが生じると、せっかく当事者に得意なことがあったとしてもそれを生かせません。ブレがないのがスタンダードになるといいですね」
こうしたことを実現するためのプログラムのひとつとして、すでに企業の人事部門や地域の支援機関の人に参加してもらええる当事者とのワークショップ開催に携わっているという。普通ならばじめにルールを説明した上で行うところだが、そのときはあえてそれをせずに開始したそうだ。

「アイスブレイクもなく、事前説明を一切しないでワークショップを始めると、当然ながら参加者には戸惑いや、行き違い、すれ違いが出てきます。実はそれが狙いで、



かもみいるの花言葉のようにこれからも「逆境に耐える」人々をつなぐような活動を期待したい

「自分の人生を豊かにするためのひとつに就労があり、働くことは、決して生産性だけが重要ではないはず。どういう働き方をすると自分の人生が豊かになるのか、これをみんなで考えるのが学習会の主なテーマになっています」

それぞれの視点から考え、整理して、比較して、考察する学習会を通した「かもみいる」の活動に、これまで下さんが経験してきたことが大いに役立つようだ。